自作川柳による転倒予防啓発活動 －川柳で 転倒予防の 策つたえ！－

饗場郁子[†]　城所智子[1)]　村井敦子[1)]　長瀬江里[1)]　安藤悦子[2)3)]

IRYO　Vol. 69　No. 10（448－453）2015

【キーワード】転倒，予防，川柳

はじめに

国立病院機構東名古屋病院（当院）は，平成13年から神経疾患患者における転倒の研究に取り組み，研究の成果よりさまざまな転倒予防対策が明らかになった．しかし，研究に関わっていないスタッフや患者・家族に対策が十分伝わっていないことが問題であった．そのため，転倒予防対策を効率よく伝えたいと考え，平成23年度に院内の自発的なグループで医療サービス向上・経営改善・医療安全などに取り組むQC（Quality control）活動として，転倒予防に関する川柳を募集し，われわれ‘チーム1010－4（転倒防止）’が詠んだ句と合わせ掲示することで，取り組みをはじめた．

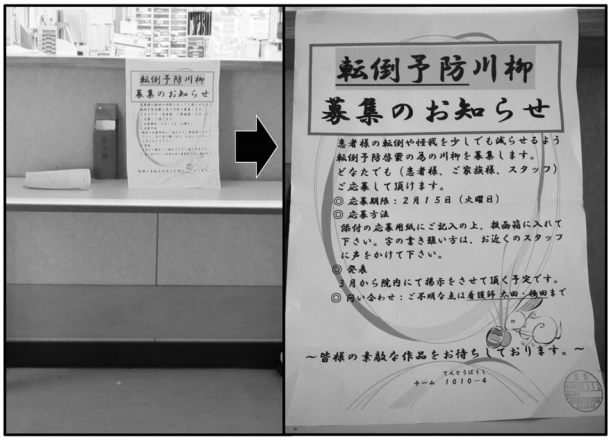

図１　転倒予防川柳の募集
神経内科４病棟，理学療法室，神経内科外来にポスターを掲示し，１カ月間転倒にまつわる川柳を募集した．

初年度（平成３年度）の取り組み

１．川柳の募集と掲示

まず，神経内科４病棟（神経難病２病棟，回復期リハビリテーション病棟，神経内科一般病棟），神経内科外来，理学療法室にて平成23年１月中旬から１カ月間，転倒予防にまつわる川柳を募集した（図１）．川柳だけでなく，川柳にまつわる思いやエピソードも記入してもらった．その結果，患者・家族から32句，医療スタッフから33句，‘チーム1010－4’から19句，計65句が集まった．その後２カ月間（平成23年３－４月）川柳を掲示した（図２）．掲示場所は，神経内科４病棟，神経内科外来，理学療法室で，廊下の掲示板以外にトイレやベッドサイドな

国立病院機構東名古屋病院　神経内科，１）同　看護部，２）同　医療安全管理室，３）国立長寿医療研究センター　医療安全管理室　†医師
著者連絡先：饗場郁子　国立病院機構東名古屋病院　神経内科　〒465-8620　名古屋市名東区梅森坂５-101
e-mail：aibai@hosp. go. jp
（平成27年７月14日受付，平成27年９月11日受理）
Fall Prevention due to ‘Senryū’
Ikuko Aiba，Satoko Kidokoro[1)]，Atsuko Murai[1)]，Eri Nagase[1)] and Estuko Ando[2)3)]，Department of Neurology，NHO Higashi Nagoya National Hospital，１）Nursing Department，NHO Higashi Nagoya National Hospital，２）Medical Safety Office，NHO Higashi Nagoya National Hospital，３）National Center for Geriatrics and Gerontology
（Received Jul. 14, 2015, Accepted Sep. 11, 2015）
Key Words：fall，prevention，Senryū

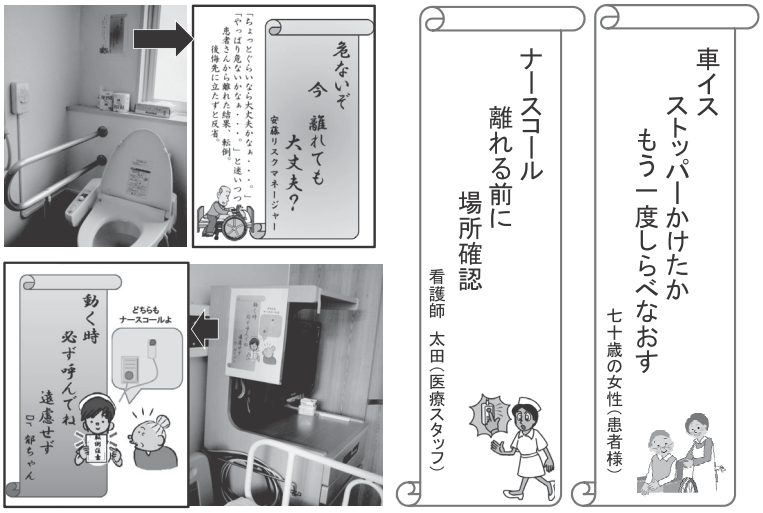

図２　集まった川柳と掲示

患者・家族，スタッフに注意してほしい場所に川柳を掲示した．

左上：トイレで排泄介助をする医療スタッフの正面に‘危ないぞ，今離れても大丈夫？’という句を設置．

左下：ナースコールをなかなか押さない患者のベッドサイドには‘動くとき，必ず呼んでね　遠慮せず’という句を設置．

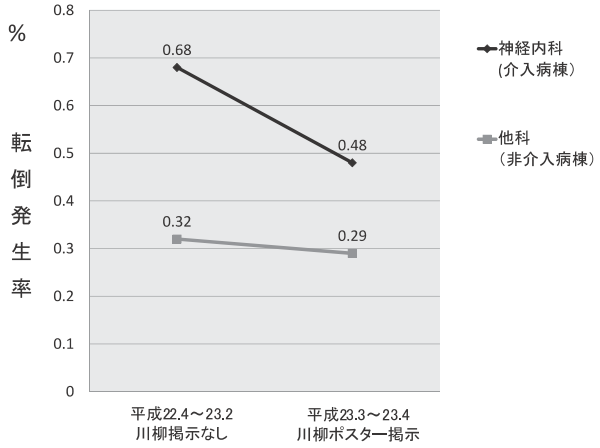

図３　転倒発生率の変化

川柳掲示前後の転倒発生率（転倒件数／延べ入院人数×100%）は，神経内科（介入病棟）では介入前（平成22年４月−23年２月）0.68%だったが，介入後（平成23年３−４月）0.48%に有意に減少（$p<0.05$）したが，他科（非介入病棟）ではほとんど変化がみられなかった（$p=0.62$）（カイ二乗検定）．

ど転倒に注意してほしい場所とし，１週間毎に張り替え，１カ月で65句の川柳が一巡するようにした．また，すべての川柳を閲覧できるファイルを患者・家族用，医療スタッフ用に常備した．

２．転倒予防川柳による転倒予防効果および啓発効果の検証

⑴　転倒予防効果の検証……転倒発生率の変化

川柳掲示前後の転倒発生率（転倒件数／延べ入院人数×100%）の変化を川柳掲示病棟と非掲示病棟で比較した．神経内科（介入病棟）では介入前（平成22年４月−平成23年２月）延べ入院51,046人中345件（0.68%）だった転倒が，介入後（平成23年３−４月）延べ入院9,637人中46件（0.48%）に有意に減少（$p<0.05$）したが，他科（非介入病棟）では延べ入院62,681人中200件（0.32%）が延べ入院11,359人中33件（0.29%）とほとんど変化がみられなかった（$p=0.62$）（カイ二乗検定）（図３）．また，川柳掲示前後の転倒リスクは，他科で0.91（95%CI：0.63−1.32），神経内科で0.71（95%CI：0.52−0.97）と，変化程度の差は有意でないものの介入病棟で低下傾向を示した（オッズ比の等質性の検定）．

⑵　転倒予防に対する啓発効果の検証……転倒予防川柳アンケートの解析（図４）

医療スタッフ・患者・家族に対し，転倒予防の意識付けができたかどうかを確認するため，４月末日に川柳をはがした後，平成23年５月２−６日にアンケートを実施した．対象は川柳を掲示した病棟に入院していた患者・家族80名，および掲示病棟の看護

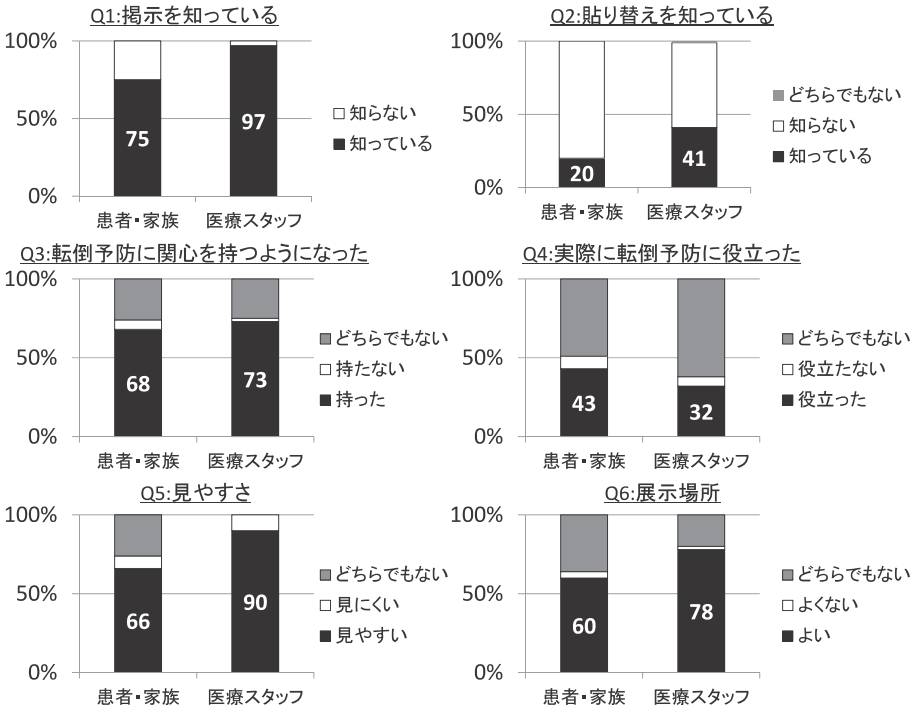

図４　転倒予防川柳についての初年度アンケート結果

スタッフ81名，理学療法士26名の合計187名．アンケート内容は，①掲示を知っていたか，②貼り替えを知っていたか，③転倒予防に関心を持つようになったか，④実際に転倒予防に役立ったか，⑤見やすさ，⑥展示場所，⑦印象的な川柳についてである．

アンケートの回収率は75.4％（患者・家族68.8％，スタッフ80.4％）．川柳の掲示については患者・家族は75％，スタッフが97％と多くが認知していた．一方，川柳を１週間毎に貼り替えていたことを知っていたのは，患者・家族は20％，スタッフが41％であった．川柳を掲示したことで，転倒予防への関心を持った患者・家族は68％，スタッフが73％．実際に転倒予防に役立ったのは，患者・家族は43％，スタッフが32％であった．どのように役立ったかについては表１のような意見が得られた．掲示場所は，患者・家族より掲示する高さが見にくいという意見が複数あり，見やすさ・掲示場所ともに，「見やすい」「よかった」という意見はスタッフに比べ患者・家族が約20％低い結果であった（図４）．その他の意見として，「ずっと貼っておいてほしい」「朝礼などで復唱を呼びかけていきたい」など，川柳の内容をリマインドしたいという意見が複数あった．

３．初年度のまとめ

転倒予防川柳の募集と掲示後，転倒は減少していた．平成22年４月から平成23年４月までの間は，川柳の取り組み以外の転倒予防対策は変更していなかったことを勘案すると，転倒発生率の減少は川柳のみの効果と考えられる．またアンケート結果より，転倒予防川柳は患者・家族・医療スタッフに対する転倒予防啓発に役立っていたが，掲示する場所や方法を改善する必要があると思われた．

２年目以後の取り組み

QC 活動は一時的な取り組みで終わるのでなく，標準化することが大切である．われわれは２年目以降も毎年，年の初めに転倒予防川柳を募集し，転倒予防に活用するという活動を続けている．２年目からは，院長賞，看護部長賞，医療安全管理係長賞など賞を設け，受賞句は展示コーナーに１カ月間展示している（図５A）．初年度アンケートの結果，問題点として挙げられた‘貼り替えを知らなかった’点を改善するために，２年目は，ポスター形式のみでなく，日めくり31枚のカレンダーという形式で掲示も併用した（図５B）．日めくりカレンダーで，川柳が変わっていくことを認識しやすくなったと思われたが，‘めくり忘れ’があり，何日も同じ川柳になっていることがしばしばみられた．そこで３年目は，電子ポスターという形で，20秒毎に自動で川

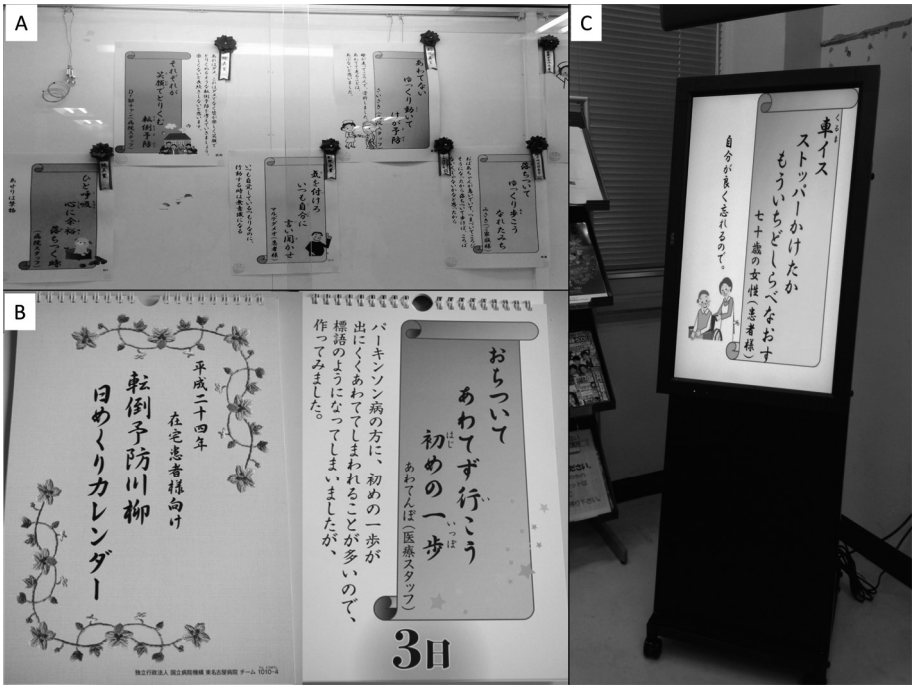

図５　受賞川柳の展示

毎年，院長賞，看護部長賞，医療安全管理係長賞，チーム1010−４賞など選び，受賞句は展示コーナーに１カ月間展示している(A)．２年目は，ポスター形式のみでなく，日めくり31枚のカレンダーという形式で掲示も併用した(B)．日めくりは，めくり忘れがあり，何日も同じ川柳になっていることがしばしばみられたため，３年目は，20秒毎に自動で川柳が切り替わる電子ポスターも併用した(C)

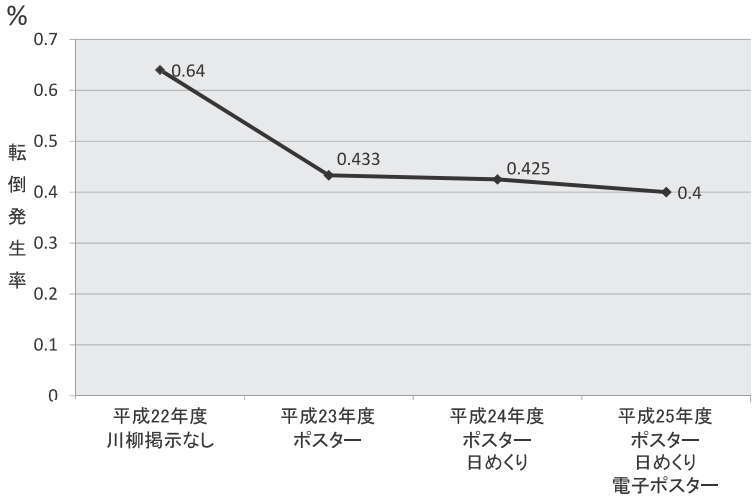

図６　川柳の掲示方法と転倒発生率

転倒予防川柳の掲示前にくらべ，川柳の掲示はいずれの方法でも転倒発生率が低く，ポスター，ポスター＋日めくり，ポスター＋日めくり＋電子ポスターの順で転倒発生率はわずかに減少傾向であった．

柳が変わっていく形も併用することにした（図５C）．その結果，わずかずつではあるが，転倒発生率は減少傾向となった（図６）．また，毎年行っているアンケート結果より，表示の切り替わりについて，患者家族は日めくり61％，電子ポスターは60％とポスターの20％に比べて周知している割合が高かった．スタッフについてもポスターの貼り替えは41％しか認知されていなかったのに対し，日めくりは81％，

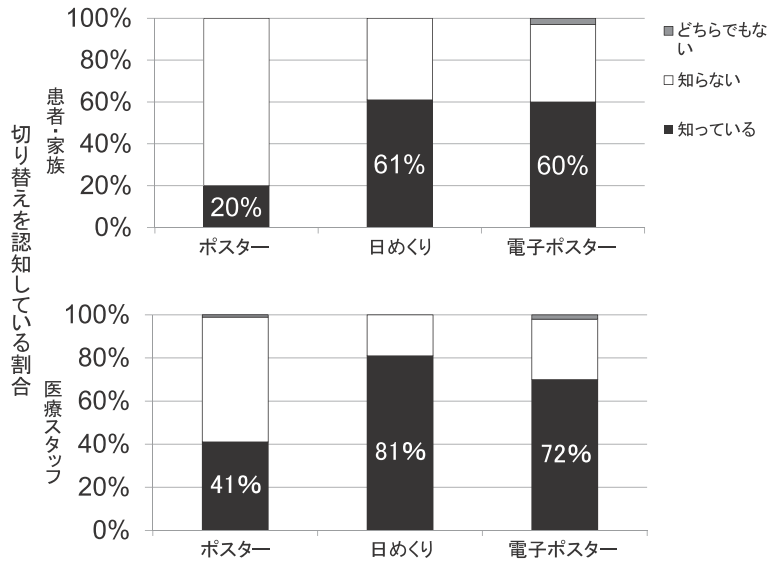

図７　川柳の切り替わりを知っていたかどうかについてのアンケート結果

患者家族・医療スタッフともに，ポスターの貼り替えの認知度よりも日めくり，電子ポスター切り替わりの方が認知度が高く，有効な方法であると考えられる．

表１　川柳がどのように転倒予防に役立ったかについての意見

患者・家族，医療スタッフから具体的な意見が寄せられた．

患者・家族
・動作を気をつけるようになった
・転倒しないように慎重になった
・自分の気持ちがしまる思い（転倒したらまた１からになるから，注意することは大事だと思った）
スタッフ
・ナースコール指導を頻回に行うようになった
・センサーの確認など忘れていたときに思い出せた
・トイレ介助で，そばを本当に離れてよいのか迷った時に役立った

電子ポスターは72％のスタッフが認知していた（図７）．患者・家族，スタッフともにポスターよりも日めくりや電子ポスターの方が貼り替えが認知されやすく，有効な方法であることが明らかとなった．電子ポスターは常に新しいものを提供できるが，設置場所に制限があるので，ポスター，日めくり，電子ポスターを併用して掲示を継続していくことで，患者家族の転倒予防への意識向上へつなげていきたいと考えている．

４年目となる平成26年度は東名古屋病院ホームページの中に‘チーム1010−４’のページ（‘チーム1010−４’の部屋）やfacebookページを立ち上げ，その中で毎日‘今日の一句’としてホームページを更新し，さらにメールマガジンの配信も開始した．‘チーム1010−４’のページから登録できるので，ご活用いただければ幸いである．また一般の方にも使っていただけるようPHP研究所から‘転倒防止日めくり’を平成27年１月に発売した．平成27年度の川柳は院外からも応募できるよう，ホームページやfacebookから応募できるように変更し，平成27年は院外からも多数応募がある．今後もさまざまな方法を組み合わせ，効率よく転倒予防のエッセンスを医療スタッフにも，患者・家族にも伝えていきたい．

終わりに

米英老年医学会の高齢者転倒予防ガイドラインによれば，長期にわたるケアが必要な患者の転倒を減らすためには多面的な介入を考慮すべきである[1]．われわれは転倒予防の取り組みとして，患者・家族向けにパンフレットを作成したり，医療スタッフ向けに勉強会をしたりとさまざまな介入を行ってきたが，転倒予防川柳の募集および掲示は，時間を取らず，注意してほしいポイントで患者・家族・医療スタッフに転倒予防のエッセンスを伝えられるという点が特長である．また形式ばらずに「川柳」という

気軽な形にしたことで，患者・家族にも親しみをもっていただけたと思う．何よりチームが楽しんで取り組むことができ，今後のチーム医療の実践に大いに役立ったと思われた．

１月号で述べたように転倒を予防するためは，医療者が対策をとるだけでは不十分で患者・家族も積極的に転倒を意識し，主体的に関わる必要がある[2]．自作川柳による転倒予防介入は‘患者・家族参加型転倒予防対策’のひとつでもある．

著者の利益相反：本論文発表内容に関連して申告なし．

［文献］

1）Panel on Prevention of Falls in Older Persons, American Geriatrics Society and British Geriatrics Society. Summary of the Updated American Geriatrics Society/British Geriatrics Society clinical practice guideline for prevention of falls in older persons. J Am Geriatr Soc 2011；59：148–57.

2）饗場郁子．患者・家族参加型転倒予防対策．図説「転倒予防」シリーズ．医療 2015；69：38–41.